

## 0.001%の自立を 0.0011%の自立へと高める

## - 「外側」から見える『成長』と「内側」の见えない『成熟』 -

「新学習指導要領の構図は、詰め込みではない「知識や技能」を元手にして、主体的に「めっちゃ考えた（思考・判断）」した上で「伝え（表現）」て、友達や先生、自分自身と「主体的・対話的で深い学び」を繰り返して、学びに意味づけ・価値づけ・重みづけ・方向づけをして、生涯を通しての「主体的に学習に向かう態度」につなげていく…となっています。でも、クラスを見渡してみると「この子は発達がとても緩やかだから知識や技能の獲得はとても限られているし、この子の「めっちゃ考える」という学習活動をどう捉えればいいのか…」という、いわゆる「（最）重度の児童」への指導・支援に苦慮しますね。

「学年の中で一番発達がゆっくりな子の自立ってどうなるんだろう？」

「目を離すとスグに他害行動をしてしまうなど、目を離せない子の自立って何だろう？」

「機嫌が悪い日には一日中泣いてしまう子の自立って何だろう？」

「まだ視線も定まっていないこの子の自立って何だろう？」

…と。

「知的障害系のキャリア教育の本（参考：「知的障害発・キャリア教育」著：名古屋恒彦 「実践キャリア教育の教科書」著：菊地一文）に（最）重度の子どものキャリア教育がどう書かれているかという、

- ① ワークキャリアではなく、ライフキャリアに着目することが大切！
- ② 毎日の活動に生きがい、やりがいを感じられることが大切！
- ③ できる・できないの『外側』ではなく、意識・意欲・主体性という『内側』に働きかける教育。
- ④ 「何故、何のために」という Before、「できる・わかる」手立てがあり、やりがいを感じている Now、「子ども自身が振り返って、自分の成長や伸びに気づくための評価」の After といった「できた」「できなかった」の2分ではない、どのようにそこに向かっていったかのプロセスに着目する教育。

等という様に書かれています。

「①②はよく聞くけれど、トキメカないけど(笑)、③④には考えさせられるものがあります。例えば、

目標「うわばきの右と左を間違わずに履くことができるようになる」

↑良く書く目標ですが、「できるようになった」「できるようにならなかった」で評価をしてしまいがちですよ。でももっと『内側』を見る評価の仕方もあるんじゃないかと③④を見ると思いませんか？例えば、

- 右と左を間違わないことは、「かっこいい」ことなんだ、と思えるようになるとか。
- 右が「こまち」で、左は「はやぶさ」。乗り口は内側だからまちがえとお客さん乗れないぜ、と「楽しく見立てられるようになった」とか。
- 4月は右左を意識しようとしなかったけど、6月になったら組み替える動きが出てきた！とか。

「できたか？できなかったか？」という「外側」からみた成長の評価は依然としてとても大切で、二元論的な視点のメリット（数値化してシビアに評価することの良さ、「行動」とは何か？に着目することの良さ、どこまでできているのか？を明確にして負っていく良さ）もあります。他方で、特に発達がとても緩やかなお子さんについては、そこに③④の『内側』から見た変化＝謂わば『成熟』を評価する視点、プロセスを追っていくという視点が入ると、本人の内側で起こっている、私たち先生が「外側」からは見て取れないような『成長』も、どう意識・意欲・主体性・物事への姿勢・態度が変化したかという「内側」で起こっている人としての『成熟』をモノサシとして、評価することができるようになりますよ。

「外側」だと「99%の支援、1%の自立」から「100%の自立」へどうしても急いでしまいがちです。しかし、「内側」から見て0.001%の自立を0.0011%、0.0012%…の自立へと高めるのにどれだけの成熟がくっついてきたのかに気づけるのも、キャリア教育がもたらすステキなメリットです。